

作成日	2019 年7月5日
学科・専攻名	児童学科

教育課程・学習成果

1. 教育課程編成・実施の方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成していますか。

【現状説明】

児童学科では教育課程編成・実施の方針に基づき、児童発達、児童保健、児童文化、児童表現の4領域からなる児童学について、体系的かつ実証的な知見を身につけることができるよう、各科目の関係・順次性を明示した体系的な教育課程を編成し実施している。1年次では、(1)【児童発達】子どもの心身や行動の発達に関する基礎的知識や理論、(2)【児童保健】健康についての基礎的知識や理論、(3)【児童文化】児童文化史・文化財・文化活動などの児童文化学の基礎的知識、(4)【児童表現】造形・音楽に関する全般的知識および基礎的技能について学習する授業科目が配置されている。2年次では、(1)【児童発達】子どもの生育環境としての家庭や社会が果たす役割の理解、発達支援・子育て支援に関する基礎的知識と技能、(2)【児童保健】疾病・健康増進・健康支援に関する基礎的知識、および運動あそびの指導法における基礎技能、(3)【児童文化】児童文学や絵本等の作品分析や作家論、紙芝居の上演や絵本の読み聞かせの基礎的技能、(4)【児童表現】造形・音楽のより高度な実践力、造形・音楽活動を通じて子どもの成長や発達を支援する技能について学習する授業科目が配置されている。3年次では、2年次までに学習した4領域の知識・技能を統合した高い実践力を習得する授業科目が配置されている。また、これと並行していずれかの領域のゼミに所属することで、特定の領域に関するより高度な知識・技能を学習し、指導教員の個別指導を受けつつ各自の研究テーマを設定した主体的な学習を進めて、4年次にかけて卒業研究（論文・制作・演奏）の完成を目指し、その過程で批判的・合理的な思考力を養うとともに、生涯にわたって学び続ける能力を確立する、体系的な編成となっている。また、学科のポリシーと授業科目との関係については、カリキュラム・マップや履修モデル等を通じて解説している。

【成果および向上施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

児童学科の領域について学習した知識・技能を活かして子ども・子育て支援を実践する力を習得するために、次期カリキュラム改定の際には、全体の科目数の増加にならない範囲で、子ども・子育て支援の実践に関わる科目を強化する予定である。

【課題および改善施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特記すべき事項なし。

2. 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための措置を講じていますか。

【現状説明】

本学科では、全年次において1クラス30人以下の少人数演習科目を必修科目として配置し、卒業までの継続的なゼミ指導により、基礎的な学習技能、および児童学科の4領域に関する知識・技能と批判的・合理的な思考力の養成に注力している。基礎的な学習技能については、1年次の児童学入門演習において、大学での学びの基礎となるアカデミック・スキルの習得を目的として、共通テキスト「アカデミック・スキル」も活用して初年次教育の充実を図っている。また、実技科目等の技能の習得に主眼を置く科目では、同一科目を複数コマ開講することで適正規模による授業運営に努め、講義科目においてもグループワークやコメントシートを活用したフィードバック等のアクティブラーニングを取り入れ、学生の主体的参加を促すよう工夫しているほか、3年次から各領域のゼミに所属するための準備教育として、2年次に児童学基礎演習Ⅰ・Ⅱを開講し、各領域の研究内容の概要を学び、学生が自らの興味関心に沿ったゼミ選択ができるように配慮している。

【成果および向上施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特記すべき事項なし。

【課題および改善施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特記すべき事項なし。

3. 学生の学修成果を把握し、教育課程及びその内容、方法の適切性についての点検・評価を行っていますか。また、その結果をもとに教育の質向上に向けた取り組みを行っていますか。

【現状説明】

教育課程及びその内容、方法の適切性については、学科会議において、授業評価アンケートや学生生活実態調査、卒業時満足度調査の結果から検証している。授業評価アンケートについては、各教員はアンケート結果に対する「授業評価所見」を公表しているが、例年、学科において他学科よりも評価がやや低い項目（シラバスの活用）については学科会議において検討を行い、評価を高めるための方策について提案がなされている。その他の項目については個人での検証に留まっており、それらについても学科として組織的な検証に取り組むことが課題である。また 2018 年度学生生活実態調査結果では、項目に「①そう思う」「②まあそう思う」と回答した割合が、「専門科目の授業内容が充実している」で 84.8%（全学平均 71.4%）、「資格取得につながる授業が充実している」で 86.0%（全学平均 61.0%）、「社会に出て役立つ実用的な専門知識や技術を身につけること（専門的能力）」で 75.5%（全学平均 62.0%）、「体験学習、グループディスカッション、ディベート、グループワーク等のアクティブラーニングによる授業が多い」で 58.0%（全学平均 44.6）であり、いずれも全学平均よりも 10 ポイント以上高かった。したがって、専門教育の充実度、特に資格取得にかかわる教育の充実度については、十分に成果を上げており、教育方法も思考力・判断力・表現力の向上を目指したアクティブラーニングを用いて概ね適切に行っているものと判断する。しかし、同調査の「異なる専門分野の科目や講座を自由に選択することができるカリキュラムが整っている」では 54.4%（全学平均 63.3%）で全学平均よりも 9% 近く低い結果であった。このことを踏まえると、児童学科においては専門以外の分野や（専門科目も含め）自由に選択できる授業科目の配置に課題があることがうかがえる。近年、卒業後の進路として保育者以外の選択肢（一般企業など）を選択する学生が増加しつつあることから、資格取得にかかわる科目だけでなく、より幅広い科目を設けることが課題である。また、毎年度、次年度の時間割を作成する作業の際に、担当者の選定については、各領域に関わる科目については各領域の専任教員が原案を提示して学科会議で検討し、また、アカデミック・スキルの習得を目的とした科目（児童学入門演習Ⅰ・Ⅱ）については学科会議で直接検討、検証している。しかし、各科目の受講者数の確認やカリキュラムの妥当性については、定期的、組織的な検証作業は行っていない。原則 4 年に 1 度実施されるカリキュラム改革においては、全学の教務委員会や学部のワーキンググループ等で全学的な観点から検証しているが、学科内においても毎年組織的な検証作業を行うことが課題である。

その他の改善に結びつける取り組みとしては、全学の FD 講演会、学科内の FD 研究会（教員によるグループワーク等）、FD 交流会（事例発表）、公開授業への参加、学外の FD 関連研修・講演会への個別参加等を通して行っている。2018 年度は学科独自の FD として「児童学科学習成果発表会」を開催し、児童学科の各領域のゼミの学生たちが日頃の学習成果についての発表会を行った（下記「教員・教員組織、FD」欄で詳述）。

【成果および向上施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特記すべき事項なし。

【課題および改善施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

以下では、改善すべき事項とその改善方策について述べる。

(1) 授業評価アンケートの全般的な項目に関する、学科としての組織的な検証。

→ 学科における FD 活動の中に、毎年行う活動として「授業評価アンケート結果の検討」を組み込み、学

科として定期的にアンケート結果を検証する。

- (2) 資格取得にかかわる授業科目だけでなく、学生が自由に選択できるより幅広い科目を設ける。
→ 学科における FD 活動の中に、毎年行う活動として「カリキュラムの検証」を組み込み、その中で時間割上の配置の工夫や科目新設の可能性について検討し、次回のカリキュラム改革の際に反映できるよう備える。
- (3) 各科目の受講者数の確認やカリキュラムの妥当性について、学科内で毎年組織的な検証作業を行う。
→（上記 2 で述べた通り）学科における FD 活動の中に、毎年行う活動として「カリキュラムの検証」を組み込み、その中で各授業科目の受講者数を確認し、人数が多すぎる／少なすぎる科目についてはその要因と対応策を検討する。また、履修者数の情報も踏まえてカリキュラムの妥当性について検討する。

教員・教員組織、FD

1. 教員組織の編成(募集・採用・昇任等)にあたって、職位構成および年齢構成の偏りに配慮した編成をおこなっていますか。また、カリキュラムに基づく教員組織となっていますか。

【現状説明】

教員組織のバランスについては、60～70 歳代が全体の約 43% に対して 30～40 歳代が約 14%、教授の比率が 79% である。特に職位構成については偏りがあるため、今後 10 年間で平準化すべく、後任採用にあたって 30～40 歳代の講師・准教授の採用を目指す。カリキュラムとの関連については、カリキュラム・ポリシーを踏まえ、児童発達領域、児童保健領域、児童文化領域、児童表現領域で構成されるカリキュラムに対し、各領域を研究分野とする教員をそれぞれ 3～4 名ずつ配置しており、カリキュラムと各研究分野が整合している。

【成果および向上施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特記すべき事項なし。

【課題および改善施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特記すべき事項なし。

2. 学科・専攻独自の FD 活動を実施し、教員の資質向上に取り組んでいますか。

【現状説明】

2018 年度は学科独自 FD として、「児童学科学習成果発表会」として、児童学科の各領域のゼミの学生たちが日頃の学習成果についての発表会を行い、学内の学生や教職員が参加した。教育活動（授業の分かりやすさ、履修指導等）に対する学生の満足度については、「授業アンケート」や「学生生活実態調査」を基に、学科会議で検証している。また、特に教育実習、保育実習については、学科会議や学科教員のメーリングリストを通して学生（実習生）の動向について教員間で情報共有を図り、学生指導において統一的な対応が取れるよう努めている。

【成果および向上施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特記すべき事項なし。

【課題および改善施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特記すべき事項なし。

内部評価委員会からの評価結果（内部評価結果レポート）

一般的なコメント（総評）

問題点が的確に認識され、改善に向けた活動が推進されていると評価できます。

改善勧告コメント（具体的な改善の指示）

教育課程・学習成果の3番目の評価項目において、**【現状説明】**でいくつかの課題を認識されておられます。これらの課題については**【課題および改善施策】**の中で取り上げ、具体的にどのように改善されるのか加筆してください。また課題等については学科会議等において定期的に検証し、次年度に進捗を報告してください。

内部評価結果レポートの改善勧告コメントに対する点検単位の意見

意見

教育課程・学習成果の3番目の評価項目については、次の3点の課題を認識している：(1) 授業評価アンケートの全般的な項目に関する、学科としての組織的な検証。(2) 資格取得にかかわる授業科目だけでなく、学生が自由に選択できるより幅広い科目を設ける。(3) 各科目の受講者数の確認やカリキュラムの妥当性について、学科内で毎年組織的な検証作業を行う。各課題については、**【課題および改善施策】**の中で取り上げ、それぞれ次のような具体案を記述した。

- (1) 学科におけるFD活動の中に、毎年行う活動として「授業評価アンケート結果の検討」を組み込み、学科として定期的にアンケート結果を検証する。
 - (2) 学科におけるFD活動の中に、毎年行う活動として「カリキュラムの検証」を組み込み、その中で時間割上の配置の工夫や科目新設の可能性について検討し、次回のカリキュラム改革の際に反映できるよう備える。
 - (3) （上記2で述べた通り）学科におけるFD活動の中に、毎年行う活動として「カリキュラムの検証」を組み込み、その中で各授業科目の受講者数を確認し、人数が多すぎる／少なすぎる科目についてはその要因と対応策を検討する。また、履修者数の情報も踏まえてカリキュラムの妥当性について検討する。
- なお、これらの課題については学科会議等において定期的に検証し、次年度に進捗を報告する。